色褪せないソ連児童文学の魅力

坂 上 陽 子

子供がロシアの小学校に通い始めるようになると，ロシア・ソ連児童文学に触れる機会が多くなった。恥ずかしながら，ロシアの児童文学といえば，チュコフスキーくらいしか知らなかったので，子供に読み聞かせながら読む児童文学は，なかなか新鮮であった。昨年の夏，1 年生終了時に，夏休みの宿題として読書リストが渡された。そのリストにあったのが,『小さなダマヴォイ・クージャ』(タチアーナ・アレクサンドロヴナ)，アグニヤ・バルトー詩集,『変わり者たち』(ユーリー・ヴラジーミロフ),『デニス物語』(ヴィクトル・ドラグンスキー),『かつてあったこと』(ボリス・ジトコフ),『笛と水差し・切り株・キノコ』(ヴァレンチン・カターエフ)，ラドヤード・キップリング短編集，サムイル・マルシャーク詩集,『くまのプーさん』(アラン・アレクサンダー・ミルン),『スチョーパおじさん』(セルゲイ・ミハルコフ),『空想家たち』『ニェズナイカとその友達の冒険』(ニコライ・ノーソフ),『魔法の言葉』『3 人の友達』(ヴァレンチナ・オセエヴァ)，レフ・トルストイ児童文学,『金の鍵，あるいはブラチーノの冒険』(アレクセイ・N・トルストイ),『パパヴォス』(アンドレイ・ウサチョフ),『アイタタ先生』(コルネイ・チュコフスキー),『いるかとマリネッタの人生から素晴らしいお話』(マルセル・エイメ）である。それぞれの本を読んで，本のタイトル，作者，主人公を書いてイラストをつけるという課題である。リストを渡された時点で，すでに読み聞かせたことがある話もあったが，子供が自分で読むことを前提としているのであれば，いくら夏休みが 3 か月あるからといって，小学 1 年生にはかなり多すぎると思われる量であり，実際担任の先生も「半分ぐらいで十分だと思う」と言っていたが，夏休みが明けてみると「全部やった」という子もいて，親に読んでもらったのでは？と疑いたくなった(子供の宿題を親がするというテーマは,『デニス物語』にも描かれており，昔から今に続く伝統？かもしれない)。このリストを見てみると,『くまのプーさん』といった世界共通の児童文学も含まれているが，ほとんどソ連児童文学の古典で，かなり保守的・伝統的な読書リストといえるかもしれない。しかし私自身は，恥ずかしいことに，トルストイやチュコフスキーといった作家以外は，このほとんどの作家たちを読んだことがなかった。古典と書いたが，これら多くの作家たちは，今でもロシアの子供たちに親しまれている作家・詩人たちであり，いまやタブレットやスマホを駆使する世代の子供たちにも読まれ続けている作家たちである。

うちの子供は幼児のころからアグニヤ・バルトーが大好きで，特に「真っ黒けな女の子」という詩がお気に入り。自分に似て共感できるのか（？），よくロずさんでいた。「その真っ黒なお手手，どうしたの？」「日向ぼっこして，日焼けしたの」「その真っ黒なお鼻，どうしたの？」「日向ぼっこして，日焼けしたの」「その真っ黒な足，どうしたの？」「日向ぼっこして，日焼けしたの」と言い訳する女の子に，「本当にそうなの？」と洗いはじめると，「日焼けしたから落ちるわけない」と叫ぶ女の子の意に反して，手も鼻も足もすっかりきれいになるという詩である。そのほかにも，バルトーの詩は，親の世代も子供たちもよく知っていて覚えており，今なお親しまれている。

学校に通い始めると，子供はドラグンスキーの『デニス物語』を特に好むようになった。オーディオブックをあきることなく何度も聞いては，大笑いしている。ドラグンスキーの息子と同じ名前の主人公・デニスの周りで起きる出来事を描いているが，その物語は今なお子供たちの心をつかんでいる。2014 年に，ドラグンスキーの息子，デニス・ドラグンスキーが，毎年 11 月末にモスクワで開催されている国際知的図書展のイベントに参加していたが，ガラス張りのメイン会場は，立ち見が出て中が見えないほどいっぱいで，子供たちが熱心に質問していたのが印象的であった。デニス物語は親の世代も当然知っているので，学校で何かのできことがあると，「ほら，デニス物語のあそこと同じだね」なんていう話にもなる。

『ニェズナイカとその友達の冒険』シリーズのノーソフも，よく読まれている作家である。こどもの国を描くニェズナイカシリーズは，SF や社会風刺の要素，冒険ファンタジーなど多彩な側面を持ち，なかなか壮大な物語である。

バルトー，ドラグンスキー，ノーソフなどは，このリストをもらう以前から子供に読み聞かせていたりして知っていたが，このリストで初めて読み，衝撃を受けたのがボリス・ジトコフ（1882-1938）であり，大きな発見であった（と言っても私が知らなかっただけであるが）。動物の話，海の話など，いずれも自分が体験したことをもとに描かれているので，説得力があり，文章に力がある。児童文学作家という枠には収まらない作家である。船乗りの経験をもとに書かれた『海の話シリーズ』などは，子供が読むには厳しすぎるのではないかと思われるほどリアリティに富み，決してハッピーエンドで終わらない話も多い。

ジトコフはチュコフスキーと同い年であり，少年時代の友人であった。チュコフスキーの回想によると，寡黙で知識が豊富で，大人の雰囲気を持っていたジトコフに対して，彼は憧れのような感情を抱いていたようである。憧れつつもあまり接点のなかったジトコフと，チュコフスキーはふとしたきっかけで親しくなり，ジトコフとともにさまざまな経験をするが，ある出来事のせいで疎遠になってしまう。1916 年にロンドンで再会して友情が復活した後，1923 年にジトコフがチュコフスキーを訪ねてくる。ジトコフは，その時

苦境にたっており，無職であった。その際ジトコフが，子供たちにさまざまな海の冒険譚を話して聞かせ，子供たちがすっかり魅了されて熱心に聞き入る姿を見たチュコフスキーが，ジトコフに小説を書くことを勧める。気が乗らないジトコフに対して，自分が添削するからと説得するチュコフスキー。そして，数日後にジトコフが持参した作品が『突風』。ジトコフは，ページの半分をわざわざ添削用に空けていた。プロの作家として，さあ添削しようと鉛筆をもって読み始めたチュコフスキーは驚愕する。訂正すべき箇所など全くなかったのだ。40 代の船乗りで，造船技師で，数学者で，物理学者であったジトコフの中に，チュコフスキーはソ連の若い児童文学の新しい希望を見出したのである。作家ジトコフの誕生である。そうして最初に書かれたのが『不吉な海』シリーズであった。

私が最初に読んだジトコフ作品は，子供の宿題の為に読み始めた『かつてあったこと』シリーズの中から，『僕がどうやって小人たちを捕まえたか』（1934）である。おばあちゃんの家にしばらく滞在していた主人公の男の子は，おばあちゃんが思い出の品として大切にし，決して触ってはいけないと強く言われていた本物そっくりの精巧な船の模型にすっかり夢中になる。きっと中には小人たちが住んでいるに違いないと思いこみ，小人たちを捕まえようとあれこれ画策する。彼らは夜に活動するだろうと考え，夜中に見張ってみたり，きっと何かを食べるだろうと，お菓子のかけらやパンを置いてみたりする。取りに来た瞬間を捕まえようとの目論見だが，眠ってしまい，なぜか朝には食べ物がなくなっているのだ！どうしても捕まえることができず，ある日とうとう，おばあちゃんが出かける際に仮病を使って家に残り，船をこじ開けることにする。ナイフを使ってようやくこじ開けるが，マストにかかった縄梯子が邪魔をして開けることができない。一瞬ためらったものの，はしごを切ってしまう。船の中は空っぽ，そして，自分がしでかしてしまったことに驚きつつ，なんとか元に戻そうとするが，当然縄梯子はもう元には戻らない。そこに鍵が回る音。おばあちゃんが戻ってくる。毛布にくるまり，「おばあちゃん，僕はとんでもないことをしてしまった！」と泣く男の子に対して，やさしく声をかけるおばあちゃん。「何を泣いているの？ほら，早く帰ってきたでしょう？」おばあちゃんはまだ船のことを知らない…。話はここで終わってしまうが，このあとどうなったのだろうか？手に汗握る展開で，ストーリーにすっかりひきつけられて目が離せなくなった。

同じく『かつてあったこと』シリーズの『プージャ』（1928）も，はらはらする展開である。子供たちがお客さんのシューバから垂れ下がっていた房（子供たちはしっぽと呼んでいたが）を，もぎ取ってしまう。客は気づかずに帰ってしまうものの，いつかばれるのではないかと恐れながらも，その房を犬に見立てて「プージャ」と名付け，すっかり楽しんでしまう。そんなある日，飼い犬がそのプージャで遊んでいるところを父親に見つかり，父親は犬がやったと思い，すっかり怒って，死んでしまうのではないか思われるまで犬を叩いた挙句，業者に引き渡すという。子供たちが怯えながらもプージャをかわいがる様子

や, お客さんはきっとシューバのしっぽの数を数えているからすぐにばれるに違いないなどと想像したりするなど, ユーモラスな場所もありつつ, とてもはらはらする展開である。うちの子供は，犬が叩かれるあたりで，結末を怖がって途中で読むのをやめてしまった。「ハッピーエンドだから大丈夫」といくら言っても，結局それ以上読もうとはせず，いまだに彼女は未読のままである。

ジトコフが作家になったきっかけとなった『海の話シリーズ』は，リアルな展開で，事故など悲劇に終わることも多い。ラジオ「ズヴェズダー」の朗読番組で偶然聞く機会があった『海の上』（1924）は，ラストシーンが衝撃的であった。乗客を乗せる飛行機に，見習いのフェドールチュクが，頼み込んで乗せてもらえることになった。初めて空を飛ぶ乗客の不安な様子や心理などが，ユーモラスに軽いタッチで描かれる。しかし，エンジンの不調で，飛行機墜落の危機が迫る。海の上である。エンジンの不調を直すためには，飛行機の外に出て，翼の上で作業をしなければならない。飛行機の状態を知った乗客たちに不安が広がる様子がここでも丁寧に描写されており，特に，その不調を直すために翼に出なければならないエンジニアの煮え切らない様子が目に浮かぶように描かれる。パイロットに，外に出て修理するよう何度言われても，道具をいじるだけで一向に出ていこうとしない。じれったくなったパイロットが自分が行くと言い出す。ここで，見習いのフェドールチュクが名乗り出る。かなりの危険をおかしながら，飛行機の外に出て，エンジンの不調を直すことに成功する。手に汗握る危険な場面ながら，初めての大仕事にわくわくするフェドールチュクの気持ちなどが明るく描写されている。しかし，飛行機の中に入ろうとドアに手をかけたとたん，滑って暗闇の中へ落ちてしまうのである。ラストは「パイロットもエンジニアもなぜフェドールチュクが戻ってこないのかわかっていた」という一文で終わる。大役を終えて無事に戻ってくるだろうという読者の期待から一転, 頭を殴られたような衝撃を受けた。

もっとジトコフを読みたくなって，4 巻本の作品集を購入した。子供のおかげでいい作家に出会えたと思う。ジトコフ自身がもっともすぐれた作品と考え，リディア・チュコフスキーが保存してくれていたおかげで，1999 年にすべて読めるようになったという革命長編『ヴィクトル・ヴァヴィチ』もそのうち読んでみたいと思う。